

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

プロローグ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹谷, 和之, Taketani, Kazuyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1769

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial 3.0 International License.



プロローグ

竹谷 和之

二〇一一年三月一日午後、「東日本大震災」とのちに命名される大地震、大津波が東北地方および関東太平洋沿岸部を襲った。そして、フクシマ原発事故である。とくに放射能問題は、各国政府（とくに欧米）の即座の対応に示されるように、尋常ならざる事態であることが見て取れた。即座にチャーター便を手配して救護策を講じた国もあった。東京のスペイン大使館へは連絡が取れず、またスペイン外務省は放射能問題が収束するまで「日本への渡航自粛勧告」を発令した。

一方、国内にいる私たちにも精確な情報が届かず、「放射能はただちに身体に影響はない」と繰り返す政府や、その言をそのまま報ずるメディアに対して苛立っていた。そのような状況下で、四月初旬には「神戸市外国語大学・バス科大学 第二回国際セミナー」を神戸で開催するかどうかを決定しなければならぬ。五名の国際セミナー実行委員と相談した結果、現況では放射能について今後を予測することは困難であり、とりあえず一年順延が望ましいという結論にいたった。早速、バス科大学エチエベステ教授に延期の連絡を取った。

第二回国際セミナーのテーマは、「グローバル化と伝統スポーツ」である。これは第一回国際セミナー（二〇〇七年九月、スペイン・ピトリア市）終了後に、次回は上記テーマで四年後に神戸開催を約束していた。

スペイン・バスカ地方には多くの伝統スポーツが今日もなお温存されている。それらの伝統スポーツはまさに民族に固有の、懐の深い文化性を保有している。それは筆者が一九八五年より現地に足を運び、さまざまな形で関わりを持つことよって体感し確認してきたことである。しかし、世界を席巻するグローバル化の激流はバスカの伝統スポーツの存在を脅かしつつづけている。当該伝統スポーツの近代化組織化やルール変更過程、およびドーピング検査導入をみればその方向性がよく理解できる。

グローバル・スタンダードで整備されれば、伝統スポーツは独自文化の容や消失にも繋がりがかねない。中にはオリンピック種目へと熱望されている伝統球戯もあるが、地域的色彩の濃い労働から派生した多数のバスカ伝統スポーツは、一時的にせよ変化の激しいバスカ社会に生きながらえる場所を見つけたのかも知れない。これはスペインやフランス、およびEUとの狭間で揺れ動くバスカの政治的立場とも呼応しているかのようにもうつつ。バスカ伝統スポーツの近代化は、既製服に身体を合わせるかのごとく、ぎこちなさを感じざるをえないのは私だけであろうか。

このことは、同時に、日本の伝統スポーツについても同じことがいえる。柔道を例に挙げれば、日本の伝統文化に深く根ざしている「柔道」と、国際化をはたしたグローバル化した「JUDO」とはもはや似て非なるものと言わざるをえない。つまり、伝統スポーツがグローバル化するとはい体どういふことを意味しているのか、その「功罪」はなにか、という問いがここに現れてくる。

また、同時に「スポーツ文化」について考えることは、その「スポーツ文化」を支えている人びとの暮らしや社会を理解するためのきわめて有効な手段でもある。とりわけ、伝統スポーツがグローバル化の激流に晒されたときに、それを支える人びとがどのような対応をしたのか、そしてまた、いま、どのように対応しようとしているのかを考えることは、グローバル化のダイナミズムを視野にいれることが可能となる。さらに、お互いの異文化理解を深め、友好・親善を深めていく上でもっともポピュラーで考えやすい入口であると言っていいたいだろう。

しかし、この問題の奥はきわめて深く、そこに潜んでいる民族と文化、経済と世界、メディアとスポーツ文化、テクノサイエンスと生命（生存）、自然性と人間性、「モノ」的身体と「生身」の身体、等々の議論におよぶことになり、最終的には思想・哲学の問題に到達する。

「3・11」の衝撃が、否応なく現代社会におけるスポーツ文化を逆照射する。つまりわたしたちが享受している近代スポーツ競技は、近代化を押し進めてきた科学的思考のもとに創り上げられたものだからである。だとすれば近代スポーツ競技も問い直されなくてはならないはずである。近代

科学の恩恵を受け、いち早く組織化、ルール化されていった当該競技はグロバリーゼーションの一翼を担ってきたのではないか。あるいはグロバリーゼーションを先導してきたのではないか、という発想も成り立つ。そして、その対極に、伝統スポーツがある。

第二回国際セミナーは、二〇一二年八月六日〜九日の開催となった。フクシマの影響によって、ヒロシマ（八月六日）からはじまり、ナガサキ（九日）に終わる。さらにこの開催期間は、「平和の祭典」ロンドンオリンピック開催期間と重複する。近代スポーツ競技と対極にある伝統スポーツについて議論されることに有縁を感じざるをえないが、この千載一遇の機会に、伝統スポーツ文化について東西の立場から議論されることに多大な成果を期待したい。

このセミナーに、特別ゲストとして東京外国語大学の西谷修先生および今福龍太先生をご招待し、特別講演をしていただく。さらに能面アーティストの柏木裕美さんによる面打実演と能面展示もお願いした。また、李自力老師による太極拳ワークショップも計画した。スポーツやスポーツを取り巻く状況がいかに世界と繋がっているかを提示していただき、理解を深められればと思う。総勢二二名の国際セミナーが始まった。

この『研究年報』には、紙数の関係上、日本の研究発表一一編及び活動報告を中心として掲載した。